

たが、更にその後左の如き、寄贈を受けてゐる。

「脇本文庫」 昭和廿九年四月八日、山梨県竜王村、本妙寺前住職故脇本觀静日禎上人の増田妙道の為、遺族より寄贈された。

「一行院文庫」 現法主深見日田猊下も、夙に祖山教学の為に御軫念されてゐるが、昭和三十年九月一日、新刊圖書の寄贈をされて自らの院号による「一行院文庫」を設けられた。今後も出来得る限り、圖書の充実に御寄与下さる筈である。

(三) 教育事業の擴充

「日本育英会奨学金制度の認可」 学生の經濟負担軽減は、教育上重要な事であるので、昭和三十年七月十四日、奨学金制度の認可をうけ、勉学を容易ならしめてゐる。

「身延山学園師親会の結成」 身延山では全国から学生が集るので、特にその保証人である、身延山各支院住職の位置は重要であるから、昭和三十年四月一日、身延山各支院住職、学生の父兄、学校の教職員等の組

織による、「身延山学園師親会」が結成され、一般のPTAよりも一層強力な教育事業推進力となる事が期待されてゐる。

「図書館建設の計画」 前述せる圖書の充実に、現在の図書館では狹隘であるので、新しく図書館の建設が計画されてゐるが、来る昭和卅二年は身延山第十四世善学院日鏡上人四百遠忌を迎えるので、これを好機とし、実現を計つてゐる。

校 友 会 記 事

廿九年度校友会活動狀況

校友会の今年度の運営方針としては、各部共、校内活動に重点を置き、校友会の持つ真の意義を発揮すべく、十月末に新しくスタートし、諸種の悪条件下にあつて、聊かなりとも新しい分野を開拓して行つた事は確かに一歩前進であつたと信じてゐる。然し乍ら現行の制度、学生生徒の環境等の実状からして、理想的な活動の望めな

い事は当然であるが、各部共、当初の計画を遂行し得なかつた事は尙前途遼遠の感深しと言はざるを得ない。

短大の方は、教職課程設置第二年度でもあり、三年制への移行の年でもあつて、校友会にとつても確かに過渡期であつた事は事実である。然し乍ら、懸案の校友会々則もその成案を見て、会員諸兄の前に提案するに到つた事は、明日への力強い一步であると考へるものである。各部の活動状況の概略は別記するが、全体的なものとしては次の通りである。

昭和二十九年十月廿三、四、五日——仏教学生大会、（於

京都市）三名派遣

昭和卅年二月四日——「原水爆禁止署名運動」展開

全五月廿五日——立正大学宗学科、先生及び生徒との座談

会本校側梅沢先生伊藤先生及び学生多数参加

全六月十一日——臨時總會、於合併教室

全六月廿一↓廿四日——仏教学生大会（於東京都）十名派

遣（総務部伊藤正文記）

弁論部の活躍「全國大会優勝」

本学の弁論部は校友会中最も活躍し、しばしば全国大会で入賞して来たが、昭和三十年十一月廿七日、愛知学

芸大学主催、全国高校優勝弁論大会に高校三年佐野法寿君を派遣。北は仙台、南は福岡に至る全国高校代表弁士廿五校の参加の下に「青年僧としての反省」の演題にて熱弁を奮い、最優秀と審査されて、愛知学芸大学長より優勝カップを授与され、中部日本新聞社外主催者側の賞状を獲得した。

運動部「テニスコートを新設」

本校はその環境上、多数人員をチームとするスポーツには専心出来ないので、卓球、庭球、柔道の如き少数メンバーの運動に重点をおいてゐる。その結果、先には、昭和廿六年、当時高校三年であつた小平慈悦君が山梨県卓球選手権を獲得したが、更に庭球部の充実をはかるため、新たにテニスコートを新設して、スポーツ精神の涵養につとめてゐる。

編輯後記

本号は佛教学関係の原稿がなかつたので、取りあはず編輯子の旧稿をのせたが紙数の制約をうけてゐるので、未載の後分は次号にゆづる。その他種々の制約の下、編輯は遅拙となつたが御寛恕を乞う

（疋田）